

事業十年の概觀

道路改良會幹事 小島 效



經濟現象の片影として交通の一面に着目する時、通信機關の繁閑、港津船舶の出入、鐵道各驛に於ける貨物集散の狀況等、其の振不振は社會經濟の沈滯或は活況を反映するものとして市人と等しく吾人の興味を惹くものあり、彼の

歐洲大戰は我國の經濟事情に豫想外の影響を及ぼし、通信の機關は全幅の活動をなしたもの、如し、然るに大戰の終熄後經濟界は漸次不況を示し、船腹の閑散、鐵道運賃の減收を傳ふと雖獨り道路交通のみは比年繁劇の勢を増したり、通信水運等は暫く擋き、單に陸運の情勢を察すれば吾人の言を俟つまでもなく道路交通増進の主因は、交通工具の變革たる自動車の發達に在り、其の結果生産品の增加を促し果は因となり道路交通の繁榮を招來せると、鐵道輸送の一部道路輸送に遷移したるとに由る、即十年前車輛數に於て僅々一萬に満たざる自動車は今日五萬を突破せんとするに徴するも其の趨勢蓋し偶然ならざるを知るべし。

翻て道路の狀態は所謂人肩馬背に次て牛馬車に依る運送時代より近時に至るまで依然たる舊態に在り是れ鐵道萬能の聲に累せられ、道路問題の閑却せられたるに因ると雖も由來鐵道輸送は道路輸送と相俟つて生産者より消費者への接觸を全ふするものなれば、此時代にありても道路問題は

忽緒に附すべきに非ず、矧んや道路運送の發達せんとする時に於て、道路の改良は一層喫緊の事業なりと謂はざるべ

○

からず、然るに道路の現状は高速車輛の走行に適せず、折角の利器も其の機能を發揮し得ざるの憾あり。首都東京の道路にして雨天には行流點在して飛沫に悩み、晴天には黃塵濛々の巷と化し、邦家の體面にも係り、黙視するに忍びざるのみならず、交通經濟の發達を阻害すること大なるものあり、本會の創設を見るに至りたる又故なきに非ず。本會設立までの過程に就ては本誌五卷三號所載「道路改良會史前之史」と題して當務理事山田英太郎氏之を詳述せられたり、本文は専ら創立後に於ける事業の大觀にして未だ盡さざるものあり讀者の諒恕を請ふ。

創設直後東京市路面改良計畫調査を遂げ、以て其の實施を促し、次で東海道並に山陽道四國九州國道改良計畫の調査を完了して、既に當路の参考に供し。又汎く道路關係者に配布する所ありたり。

惟ふに道路計畫は、交通の現勢に察し將來を考量して樹立せざるべからず、而して各地交通の情勢は隨機之を調査せることありと雖も、全國交通の大系は時を同ふして之を施行し始めて其の動態を察すべきが故に、時日を定め全國一齊調査を實施し、或は調査部を設けて道路に關する法制費用、稅制、經濟、技術、線形等の基本研究を行ひ、其の一部は既に之を完了せり、又道路事業の實際に携はれる者の爲に、數次講習會を開設して其の實力を養成し、各地に講演會を開催して世論の喚起に勵め、時に臨み素懐を政府に披陳して道路費に關する考慮を要め、日進の道路問題については單行印刷物を頒布して之を世に紹介し、機關雑誌を發行して各種の研究と事業の實蹟とを明かにし、視察員を囑託して海外道路の近情を尋ねる等、以上過去十年事業の概觀なり尙各梗概を敍し其の過程を考察せむとす。

附金、受益者負擔金及一般市費を以て支辨し、尙不足分は短期借入金を以て經理せんとするに在りたり。

○
東京市路面の鋪装は最近著しく普及して往時の面目を改むるに至れりと雖、大正八年當時に於ては其の現状觀るに忍びざるものあり、本會の創立も亦之に動機したるものと言ふを得べく、従つて本會が東京市街路鋪裝工事計畫調査を了るや、事業の助成を政府當局に建議し、事業費其の他の研究に關し理事會に於て討究せること幾回なりしを知らず、當時東京市助役永井環本會理事を兼相互の聯絡を有つこと緊密なるものあり、偶道路改良の聲、叡聞に達しけん最も内帑の資貳百萬圓を東京市に下し賜ふ、當時東京市は勿論道路問題を憂ふる者感激措く得はず、本會役員亦勇奮して事業の達成に勵むる所あり、市は本會の調査に基き

大正十年度以降同十五年度に至る六箇年を期し、工事費三千九百四十六萬圓を以て重要路線長約十六萬千餘間、面積車道約八十七萬五千餘坪、歩道約十九萬三千四百餘坪鋪裝の計畫を樹て、經費として御下賜金、國庫補助金、府稅下

○
既成の事業を空ふし、災害の結果事業の一部は國家の直營となり、一部は從來の豫算を更正して市之を行ひ相須つて今日の盛觀を呈するに至れり、由之觀之當初本會の斯業に對する努力蓋し徒爾なりざりしを知るべし。

東海道は歴史上文學上將た名工の圖繪に至るまで其名古今に著聞せり、鐵道の開通は五十三次の衰微を來し、道路の狀況近世に至るまで改良の迹を見ず、山陽道は東海道に比し其狀殊に甚く、是れ海路の便に依り道路の利用鮮なか

りしに因るなるべし、然るに兩道は本邦の幹線道路たるを以て其の改良は一日も緩ふすべきに非ず、依て先づ東海道

自動車踏査を行ひ同時に沿道府縣の賛同を得て本線交通の

状勢を閲せり、在京新聞社此舉を賛し社員を派し、内務省

より技師比田孝一、本會より副會長石黒五十二、常務理事

堀田貢、理事近藤虎五郎、同松木幹一郎、幹事佐上信一、

同牧彦七、囑託田中好、幹事岡野碩、書記中島長治郎等、一行

自動車に分乗、大正八年十一月東京市大手町を發し品川に向ひ、箱根靜岡名古屋大津大阪各地に宿泊神戸に到る、其の間自動車の通する能はざる所は之を避け或は車輛を鐵道

に托送し縦に前後を聯絡せり、次で大正十年幹事牧博士囑託工學士三浦七郎と共に中島書記を隨伴、月餘に涉り本道の行脚調査を行ひ、爾來攻究を積み理事會の議を經大正十一年六月調査書を公にしたり、本書一旦出づるや沿道府縣範を之に採り事業計畫を進めたるを以て、今や京濱・阪神の二大道路は路上交通の殷賑を示し、函嶺、鈴鹿の險道も自動車の快走に適するに至り、富士、大井二大橋の竣工、

天龍・濱名の兩大橋工程次第に進捗し、全線改良の實績大いに見るべきものあり。

○

山陽道亦東海道に倣ひ自動車踏査の業を繼ぎ副會長石黒五十二、幹事松本學、同牧彦七、鐵道事務官細野躋、囑託田中好、幹事都筑通督、沿道各新聞社派出員等、自動車を連ね沿道各縣の援助を得、大正十年七月神戸相生橋を出發岡山、廣島、山口の各宿泊地を經、下關市に到着此の旅程百三十三里餘、而して本道の改良調査は本會調査部の設置に依り、四國九州國道改良計畫と併せて之に移し、同部の調査を經昭和三年六月之を公にしたり、本路線改良事業の實蹟は東海道に一籌を輸したれども關係各縣は本會調査に則り、漸次事業計畫を進むるを見れば、沿線の改良せらるるの日亦遠きにあらざるべし。

調査部は其の組織を第一乃至第五調査科に分ち第一調査科に於ては道路及其の交通に關する法制第二調査科に於ては道路の經濟上は道路費に關する財政、第三調査科に於ては道路の路面構造及の効果に關する事項第四調査科に於ては道路の路面構造及維持に關する事項第五調査科に於ては道路の線形及第四調查料に屬せざる道路技術に關する事項等各科調査科目を定め、副會長内田嘉吉を調査部長に第一科委員に堀田貢、山田英太郎、次田大三郎、島重治、松本學、篠原英太郎、第二科委員に内田嘉吉、桐島像一、岡野昇、次田大三郎、山根武亮、河津暹、田澤義輔、渡邊鐵藏、田中廣太郎、橋本圭三郎、第三科委員に松木幹一郎、中川正左、村井一郎吉次田大三郎、藤山雷太、松岡均平、藤原俊雄、明石照男、中野金治郎、第四科委員に長岡隆一郎、牧彦七、直木倫太郎、近新三郎、太田圓三、茂庭忠次郎、内山新之助、物部長穂、第五科委員に次田大三郎、比田孝一、池田圓男、島重治、木原清、市瀬恭次郎、物部長穂、以上諸氏を嘱託、大多數の承諾を得、大正十四年十一月各科聯合調査會を開

き各科主査を定め爾來事業の進行を圖れり、其間各科委員中交替ありたれども、第五科に於ては山陽道、四國九州國道改良計畫、査を了へ、第四科に於ても簡易鋪道工法の調査、遂げたるを以て、何れも之を印行して前者は關係廳其の他へ後者は汎く之を頒布したり、尙第三科に於ても道路運送費輕減に關する事項、道路交通用具改善に關する事項、道路と鐵道、軌道の建設費並に營業費の比較、道路運送の發達が産業の分布國民の生活狀態に及す影響の研究等調査綱目を決定資料の蒐集に努めたれども、關係事項廣汎にして未だ之を結了するに至らず、第一第二調査科亦之に雁行の進程に在り。

交通情勢調査、道路の現在交通の状勢を究め將來の改良計畫と維持修繕とに資する爲に交通狀態を調査することは極めて緊要の業なれども、我國未だ全國に彌り期を一にして行はれたることなく、本會は昭和三年十月二十五日より三日間地方廳の贊同を得、同年七月内務省に於ける地方土木主任官會議に示されたる交通情勢調査要項「道路の改良

「十卷八號所載」に則り全國一齊に之を行ひ、其の調査表を集計して地方別圖表を作成之を印刷して全國交通情勢調査圖を完成せり、本調査は年内の一季節短期間のものにして固より完璧たるを期し難しと雖も、又改良上の重要資料たるべく、此種事業の先驅となり地方獨自の施行を促し漸次資料の充足を見んか其裨益鮮少ならざるべし。

道路職員の養成 道路法の施行は我國道路行政に一新紀元を劃し道路改良の機運勃興せりと雖も當時未だ適當なる技術者を得ず、道路工學の研究は最も焦眉の急に迫れり、因て大正九年六月東京外六府縣及六大都市に對し技術者の海外派遣を獎勵し、同時に文部當局、東京、京都、九州各帝國大學を始め官公私立專門學校へ道路工學の振興に關し建議書を提出せり、然れども尙轍齕の急に處せん爲め卒先して道路職員講習會を開催したり、其の第一回は大正十年夏開會事務に關するものは營造物論を山田準次郎、地方財政論を田中廣太郎、交通政策を河津遼、道路法を松本學、地方公債論を土方成美、事務取扱に就て佐々木光綱、田中

草野源八郎、橋梁學を三浦七郎、應用地震學を物部長穂、混凝土工學を宮本武之輔諸氏を各講師に頼し科外として帝都復興計畫を吉田茂、隅田川の架橋工事を田中豊、東京地下鐵道を中川正左、東京市道路の鋪裝を牧彦七、大阪市道路の鋪裝を岩田成實、道路運送を中野金次郎、道路材料試驗を高田昭、三木榮三諸氏に各講演を請ひ實地視察をなしたること前回に倣へり、第四回は昭和三年八月開會土木行政を宮崎通之助、道路行政を丹羽七郎、受益者負擔に就て

飯沼一省、道路改良費の財源に就て武井群嗣、道路事務の

取扱に就て田中好、交通整理の設備に就て藤岡長敏、應用地震學を物部長穂、高級鋪裝道を牧野雅樂之丞、コンクリート橋を三浦七郎、簡易鋪裝道を菊地明、道路材料に就て藤井眞透、鋼橋を青木楠男、道路の構造を岩澤忠恭、自動車専用道路の構造を永田年、隧道工事の施行に就て平山復一郎、道路工事用機械器具を田村民平諸氏に各講師を嘱託、科外として九折路に就て牧彦七、道路施工に就て前川貫一、潜函工事に就て正子重三、歐米の道路に就て柳井照藏、香

港上海の道路上に就て坂本一平諸氏の各講演を請ひ道路工事の實地視察を行ひたること前例の如し、講習修了者は第一回二百名第二回百五十名第三回百四十九名第四回百六十三名通して六百五十三名を出せり、講習者は内地、朝鮮、臺灣、關東州等の各官廳に在職して道路事務又は技術の實際に携はれるものなれば、本講習は道路改良の潛勢力を涵養せるものと謂ふべし。

○

道路事業の主管は府縣之に任じ國が之を助成すれば其の狀態は自然改良せらるゝ筈なりと雖、當時の道路事情は改良の急轉切迫せるものあり、徒に官の施設に一任して偷安を貪るを容さず、須らく官民一致事業の促進に努めざるべきからざるの要を認めたり、仍て各地に講演會を開き道路問題を闡明ならしむるの要亦此に在り。大正九年長野縣下へ石黒副會長松本、牧、岡野各幹事、田中囑託、岸本鐵道局參事、中島書記、同年同縣南佐久郡へ佐藤囑託、大正十一年

京都市へ石黒副會長、佐藤理事、松本岡野兩幹事、岸本鐵道局參事、田中囑託、小島書記、同年十月山口縣下へ牧野幹事、三浦囑託、都筑幹事、大正十一年東京市大手町に於て牧幹事、大正十四年北海道各地に水野會長、内田副會長、

松木、中川、堀切、比田、島、木原各理事牧野、都筑兩幹事、大正十五年北海道各地へ岩澤幹事、茨城縣各地に武井幹事、昭和二年北海道並に青森縣へ佐藤、武井、岩澤各幹事、同年鳥取、福井、石川地方へ中川理事茂庭評議員、佐藤、都筑兩幹事、昭和三年福島、山形、秋田、富山の各地へ松木、中川、牧各理事、佐藤、武井、都筑各幹事等出張各地講演會を開催したり、而して其の演題は富源の開發と本會の使節、道路政策、道路の改良と鐵道、道路改良費、道路と港灣、文明の推移と道路の改良、國防と道路、歐米に於ける道路の近情、日米兩國に於ける道路改良の状況、自動車と街路、道路改良と愛護、道路の保安、我國道路の現代的價値、道路の建設と維持、交通上より見たる道路、道路は一國文野の象徴なり、道路改良と其の財源、將來の

交通機關と道路の改良等にして各地何れも盛況を呈し道路問題に關する世人の注意を喚起したり。

○

道路事業に對する政府の改修及助成豫算は一般豫算歲出臨時部支辨に屬するを以て、政府の方針に因りては活潑自由の項目たり、大正十四年時の政府は極度の緊縮方針を振翳し、往年樹てられたる改良政策を撤廢し、計畫豫算の全部を削除せらるゝ哉の說専らなりしかば、斯くては漸く擡頭せる我國の道路改良事業は大頓挫を來たし延いて地方財政を脅威すること大なるのみならず、從來此事業に投資せる效果終に空しからんとする虞ありたり、滋澤顧問、山田理事は本會理事會の議に依り、具體案を提げ關係各大臣を訪ひ意見を披瀝し、其の結果當局も本會の議を認め、道路改良費豫算克く三百五十萬圓を維持することを得たり、翌大正十五年に於ても政府は再び改良費豫算の減額を傳へたれば、急遽理事會を開會して之が維持の對策を決し、滋

澤顧問、山田理事、内藤監事、關係大臣を訪ひ建議書を提出、其の趣旨を披陳して前年度豫算額を維持することを得たり、昭和三年度豫算編制期に臨みては從來の改良費豫算額を企圖し濱澤顧問、山田理事、建議書を携へ改良事業の切實緊急なる所以を説述して大いに當局の共鳴を得、前年に比し三百五十萬圓の増額を見たりしが、議會解散の爲實施を得ざりき、近時世論の趨勢は道路問題を重視するに至り、速に事業の實施を渴望すと雖も、財政當局の所見は著しく本會の希望と背馳し道路費運命其の豫算上の地位と相應じて濱海の鷗の如く本會多年苦慮の存する所なり。

印刷物の刊行 道路に關する系統的智識は一場の講演に

より能く盡すべきに非ず、殊に道路問題が世の視聽を惹くに至れるは最近十年のことと係り、近世の道路交通に適する建築の技術に於て將た道路事務に於て研究するべき事項少なじとせず、此缺陷を補はんとして單行印刷物を刊行せり、其の第一輯は物部工學博士の道路橋の設計に就て、第二輯は平林工學博士の地質學、第三輯は佐藤江學士の道路

の設計、(第四輯未刊)第五輯は田中土木事務官の道路法、第六輯は飯沼法學士の受益者負擔制度等にして會世の期待に副ひ各輯合せて約七千部を頒布し次で第四調査料に於て簡易鋪裝工法の調査を遂げたるものを簡易鋪裝道と題して之を公にせり、之亦世間の渴仰を満し既に二千部を出せり而して其の頒布先は何れも道路事業の實際家なれば之等刊行物が道路職員智能啓發の端緒となり延ひて砥礪研磨の風を馴致し之が因となり道路事業に果を結べるを見るとき其の機を得たりしを欣ぶものなり。

○

機關雑誌の發行 道路改良の急務、軍事上より見たる道路、善良なる道路の建築、道路行政、鐵道側より觀たる道路問題、道路改良に就て、產業道と道路、鋪木と木材防腐方法、道路費と國民負擔等に關する名家の論說を收めて大正九年十一月第一輯を創刊し次て同年一月第二輯、同年四月第三輯、同年十二月第四輯の順序を逐ひ不定次に發行

し來りしか、斯くては不充分なるを以て大正十二年六月より月次發行に改め、七月號を發行後突如として大震火災の厄に遭遇し、發行地の印刷能力殆んど全滅に頻せるを以て、災後を整へ同年末遠く金澤市に印刷所を求め五卷三號を發行せり、越えて十三年改卷六の一號を發行し、爾來毎月之れを發行して渝ることなく本記念號に迨ひて改卷第十二を計ふるに至る。輯むる所は論說、研究、史料、海外道路時事、資料、談叢、實蹟等を主要目次とし、掲載題名何れも時代必須の論題に觸れざるはなし、本誌頒布の範圍は中央地方の官廳及各帝國大學専門學校職員並に出資會員に限りたれども近時道路關係職員は勿論一般道路事業者の間に必讀せらるゝに至れり。

○

し東海道沿線各廳に建議したことありしが、其の議は終に行はれずして止みたり、然れども海外の道路事情を究むるの要は尙渝ることなし、昭和二年兵庫福岡兩縣の贊同を得山本廣一、坂本一平兩技師を上海、香港に、昭和三年東京、兵庫兩府縣と協議して藤田周造、田邊良忠兩技師を北米に、昭和四年福島縣の照會に應じて技師中川幸太郎氏を歐米に執れも之を派遣するを得たり、本年尙二名の海外派遣員を計畫せしが政府の緊縮政策に省みて其の實施を中止したり、海外視察の利益たる實際其境域を踏みて初めて之を得べく一片の報告の能く察すべきに非ず、されば他日再び其機を得て益々視察員の海外派遣を獎勵せむとす。

○

技術者の海外視察 技術者を海外に派遣し歐米道路の實況を視察し之を我國道路の改良に資補するの議は、夙に本會の唱導する所にして既に大正九年中道路起業の計畫あり

一、服部金太郎、原六郎、早川千吉郎、橋本圭三郎、堀越角次郎、織田昇次郎、小野金六、大川平三郎、大村彦太郎、渡邊治右衛門、渡邊勝三郎、各務幸一郎、加藤正義、門野重九郎、川崎八右衛門、神田鐸藏、吉田丹次郎、田中平八、田中銀之助、高津六平、高島小金治、團琢磨、瀧澤吉三郎、相馬半治、根津嘉一郎、内藤久寛、成瀬正恭、久米良作、塙田四郎、山下龜三郎、山本悌二郎、馬越恭平、松方巖、前島彌、増田義一、藤原俊雄、福原有信、近藤廉平、小池國三、小林富次郎、江口駒之助、手塚猛昌、有賀長文、阿部吾市、淺野總一郎、朝吹常吉、佐々木慎思郎、佐々木勇之助、木村清四郎、小西安兵衛、柿沼谷雄、水越理庸、白石元治郎、土方久徵、鈴木梅四郎、濱澤榮一、須田利信、末延道成、矢野恒太、村井吉兵衛、村井貞之助、岡崎久次郎、昆田文次郎、福澤桃介（文献燒失の爲掲載漏等保難し）諸氏其の趣旨を認め事業を翼賛し各多額の資を醸出せられたり、而して豫定期間の過半を得たるに尙道路に關して法制上、經濟上、技術上諸般の事業鮮しとせず、大正九年幹

事佐上信一氏官命を帶び歐米巡遊の途次英國道路改良會の情況を視察し其の組織及事業を報じ、歸朝後本會を永久團體となす要ある旨を進言せり、理事會亦其の必要を認め大正十年十一月十二日內務大臣の許可を得社團法人道路改良會と成したり、乃況く全國に亘り會員を募り地方廳に於ても本會の事業を支援せられ各地相應の入會者を得たり、現に通常會員三百六十四名特別會員五十二名贊助員五千四百四十四名を有し道路に關し有力なる團體たるに至れり。

道路は生産の機關として其の整否は一國産業の振否に著大の關係を有し、天然の資源は之に因て開發せられ生産者は之により販路を開拓すべく、消費者は之によりて品種選擇の自由を得べく、自然の景趣も之によりて世に著れ、緊急要務者は之に倚りて自動車を快走すべく、人生の煩ひも之によりて郊外の風光に其の塵を拂ひ得べし、然れば道路の良否は社會經濟力の發達と人生福祉の増進とに關すること大なりと謂ふべし、幸に世の協戮を得本會創立の目的を達成せんとす。